

●特別賞【論文概要紹介】

豊かな体験活動を通して育成する
キャリア能力

広島県尾道市立原田中学校 きむらよしえ
木村好江

【実践の概要】

本校は、全校生徒21名という小規模の中学校である。ほとんどの生徒が隣接する幼稚園・小学校に通学し、少人数の固定化された人間関係のまま、幼・小・中と12年間を過ごすため、新たな人間関係づくりが不得意な生徒が多い。そのために、「原田町を離れても新しい環境の中で、豊かな人間関係形成能力を発揮し、自分らしく輝ける生徒」、「地域と自分に自信をもち、『志』をもって将来をしなやかにたくましく生き抜く力をもった生徒」の育成を目標とする。「夢を志に」をキャッチフレーズに、教務主任と研究主任を中心として、組織的にキャリア教育に重点を置いて、キャリア能力を育成する教育活動を推進してきた。

【論文内容の紹介】

1. 研究の概要

- 全ての教科において、キャリア能力の視点を取り入れた原田授業モデルに取り組み、教科学力を向上させ、思考力・表現力を育てる。
- キャリア教育の豊かな体験活動で、教科において身につけた学力や思考力・表現力を活用し、キャリア能力を高める。

2. 取り組み内容

(1) 原田モデルの授業づくり

①キャリア教育の諸能力（6領域12能力）と各教科目標の関連を図る。

②授業の中に「思考活動場面・表現活動場面」を盛り込む。

③教員相互授業参観の実施

一人3回以上の授業参観・評価を行う。

(2) 豊かな体験活動の取り組み

①NRC活動（農業アントレ）

腐葉土を生産し販売する活動を通して、「ふるさと意識の醸成」、「起業家精神の^{かんよう}涵養」、「起業家的資質・能力の開発」、「学習意欲の向上」を図る。

②職場体験（ブドウ農園実習）

5日間の職場体験学習を通して、勤労感・職業観を養う。

③生き方講話

さまざまな職業の社会人を講師に招き、講師の仕事についての思いや生き方に触れ、自己の生き方を考える。

④地域の伝統文化の継承

地域の一員としての自覚を高める。

3. 成果と課題及び今後の改善策

教科の基礎基本定着率及び生活アンケートの「思考力」「表現力」を問う質問の平均肯定率が、県平均を大きく上回った。キャリア能力や自己肯定感の生徒アンケートの肯定率も伸びた。

今後も、教科の基礎基本を土台にして、思考力・表現力を育てていく必要があると考える。そのためには、学校での学習と家庭学習が両輪となって進めていくことにより、基礎基本の定着を一層図る必要がある。毎時間の授業での「ふり返りシート」によって、生徒の自己評価能力を高め、自らすすんで学習する力を育て、家庭学習の充実を図る。そして、教科で身につけた教科学力、思考力・表現力を、豊かな体験学習で活用し、地域の一員としての自分の役割を認識させて、社会参画能力等のキャリア能力をさらに高めていく。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

ことばの力をつける 英語の学習

—暗唱大会への取組を通して—

奈良県広陵町立真美ヶ丘中学校

たてまつ だいすけ
立松大祐

【実践の概要】

全校生徒が取り組む英語暗唱大会は、本校における英語教育の特徴の一つであり、その歴史は長い。学級大会から学年大会へと向かう生徒の姿からは、ことばの力をつけるための基礎づくりと、学習者として自律するための方策を学ぶことができた。

【論文内容の紹介】

1. 論文の概要

本校では、年間行事として英語暗唱大会が組み込まれている。学年ごとに暗唱課題は異なるが、全校生徒が9月に行われる学級大会に向けて懸命に暗唱練習を行っている。7月初旬になるとPC部の生徒とALTの協力により暗唱用CDを作成し、生徒に1枚ずつ配布して音読練習を開始する。音読練習は、全体練習、個人練習、ペア練習など、さまざまな練習形態や方法にバリエーションを加え、一人一人が自信をもって暗唱できるようにと願い、指導を続けていくのである。

学級大会では、前日まで暗唱できなかった生徒が、暗唱に成功するなどの驚きがあり、生徒の多くは新しい発見と達成感を感じることができた。生徒と教師の審査から選ばれた3～4名の学級代表（5クラスから6クラス）の生徒は、10月の学年暗唱大会に向けてさらに練習に励むこ

とになる。暗唱に取り組む生徒の姿や感想からは、音読や暗唱練習の繰り返しはコミュニケーション能力育成の基礎となり、自己学習力の育成にもつながる活動になり得るととらえることができた。

2. 暗唱課題と審査

1年生は「奈良公園の鹿」を、2年生は「十津川村の谷瀬の吊り橋」を、3年生は「大茶盛式」または「法隆寺」という県内の題材を課題としているが、1年生では自己紹介を課題にすることもある。審査は教師と全生徒が行い、以下の三つの点を評価している。

- ①English（発音、リズム、音の強弱など）
- ②Delivery（ジェスチャー、アイコンタクトなどを含む話の運び方）
- ③Memorization（確実な暗唱）

3. 暗唱大会後の感想文より（抜粋）

- 1年のときよりもカタカナ読みがなくなってきたと思います。一番成長したと思うのは発音で、これからもっと発音に磨きをかけたいです。年に何回かスピーチ大会をしたいなと思いました。
- 英語を話せるようになってきた気がするし、文法がわかってきました。

4. まとめ

音読や暗唱の繰り返しは、英語の音韻、語彙、チャンクなどの学習になるとともに、帰納的な文法学習にもなり、コミュニケーション能力の基礎づくりにつながると考えられる。第2言語習得研究においてもインプットの重要さと、注意を払わなくても無意識にできるようになる自動化のための練習が、言語習得には必要であると指摘されている。

つまり、暗唱や音読練習はインプットとアウトプットのバランスをとり、文法規則などの自動化を促しつつ、スピーキングへの橋渡し役となる活動であり、言語の習得に寄与するものと考えられる。また、練習方法の工夫により気づきや発見

をもたらし、自己学習力の育成につながると考えられる。

全校英語暗唱大会は、歴代の先輩教員と生徒が築きあげてきた本校の文化である。これを生徒とともに大切に育て、ことばの力をつけるための試みをさらに発展させていきたい。

●奨励賞【論文概要紹介】

体験学習を今後の生活につなげ、自己肯定感を育むキャリア教育

なかじまひろふみ
長野県飯田市立飯田西中学校 中島博文

【実践の内容】

本校はキャリア教育を「将来の夢や目標に向けて学ぶ目的や働く意味を考え、自分の生き方を探るための教育」ととらえ、全教育課程でキャリア教育を実施している。中核活動として、1年生が農業体験、2年生が職場体験、3年生が林業体験に取り組んでいる。

しかし、平成20年度当初、3年生は林業体験学習に向けての意識が高くなかった。4月、一人の生徒が「地球温暖化が進行するので木を伐ってはいけない」と発言した。そこで「木は伐ってはいけないのか間伐するのか」という問題意識を育んだ。5月末、探鳥会で入山した生徒たちは間伐の事実の声に驚き、「自分たちも間伐体験を!」となった。

間伐体験に取り組んだ生徒たちは、「体験でお世話になった曙友会の人たちは、大変な仕事をしているので給料は高い」と考えた。しかし、職業ではないことを知って大変驚き、新たな問題意識、「職業ではないのに、曙友会の人たち

の願いは何だろう」を追究した。その結果、地域貢献の大切さを学び、地域の行事に積極的に参加する3年生となった。

平成21年度、前年度の3年事例から示唆された「問題意識をもたせることの大切さ」を基に、新たな指導課題「体験学習で得たことを今後の生活につなげる」について、1・2学年で実証を試みた。成果は、以下のようである。

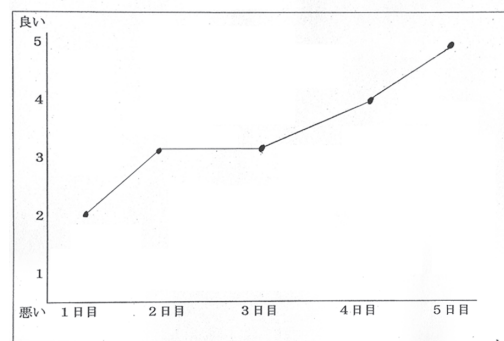
- ① 問題意識をもった追究を振り返ることで、自分が歩むべき目標を見い出することができる。
- ② 意欲的に取り組んだことや感動体験を発表し合い、級友らの評価を生かすことで自己肯定感を育むことができる。

実践を通して、キャリア教育とは「自己の内面を耕し、自己肯定感を育み、それを未来につなげる教育」といえる。

【論文内容の紹介】(2年事例に限定)

生徒たちは、5日間連続の職場体験学習後、図「5日間の気持ちの変動」を作成し、学習問題「職場体験で最も心に残ったことを語り合おう」を追究した。体験先が異なる4人で班を構成し、次のように班学習を行った。

実際の5日間の自分の気持ちの変動



●図/S君の「5日間の気持ちの変動」

- ① 一人一人が最も心に残ったことを中心に、職場体験のあらましを発表する。
- ② 発表者へ質問をする。

③ 発表者へのメッセージカードを書く。

カードその1「体験を聞いてその気持ち、わかるわかる!と思ったこと」、カードその2「体験を聞いて『いいなあ』『素晴らしいなあ』『すごいなあと感じたこと』」を書き、本人に手渡す。

④ 手渡されたメッセージカードを読んで感じたことを書く。

【班学習③の内容】—職場体験の成果—

S君は、級友が書いたメッセージカードを受け取った。そこには「工場の中で周囲とのコミュニケーションをとって仕事をしていくのは少し大変そうだったけど、Sさんのグラフがコミュニケーションがとれるようになってからどんどん上がっていて、いいなあと思いました。」と記されていた。メッセージカードがS君の琴線に触れ、S君は、普段見せたこともないような笑顔を見せ、大切にメッセージカードを持っていた。その所作からも、S君の自己肯定感を垣間見た。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

学校総体としての 国語力向上のための 共同体制の工夫

熊本県菊池市立菊池南中学校 ひらのただひろ
平野忠博

【実践の内容】

本校では、「国語力向上指導者養成研修」の資料などを基に、平成19年度から学校総体として「言語活動の充実」に取り組んできた。

【論文内容の紹介】

1. 論文の概要

新学習指導要領に、言語活動の充実について明記された。国際化や情報化が進展する中で、自らの考え方をことばで表現したり、的確に文章にまとめて自らの情報を発信したりする能力がこれまで以上に求められている。

よって、言語活動の充実(国語力の向上)には、学校総体で共同体制の確立に取り組むことが肝要と考え、本研究に取り組んだ。

全職員が国語力向上を位置づけた研究授業や、言語環境の整備に取り組んだことで、各種学力調査の結果の向上、図書貸出冊数の増加、作文や少年の主張をはじめとする学習コンクールでの入賞を果たすことができた。

2. 研究の実際

1 共同体制の基盤づくり

校内研修を通して、共通理解を図り、共通実践の具体的な内容の検討を行った。

まず、国語力向上が求められる背景について、文化審議会答申(H16)などで理解した。次に、PISA調査や全国学力・学習状況調査で、生徒の実態や求められている国語力の把握を行った。以上を踏まえて、各教科で担うことのできる国語力や、全教科で共通して取り組める授業展開について検討した。

2 言語環境の整備

(1) 語彙を豊かにする取組

- ア 国語辞典コーナーを各階に設置
- イ 日本語検定や漢字検定を実施
- ウ 目的に応じた掲示

- 情報発信の場……通信、ポスター、新聞等
- 教育的指導の場……場に応じた過ごし方、名言、目標、道徳教育等
- 学習成果の場……授業の作品や部活動の賞状やトロフィー等

(2) 読書活動の推進

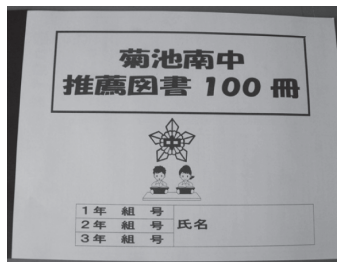
ア 「生活ノート」に、毎週の読書記録欄

イ PTAと生徒会と読書推進部の連携

PTAの研修委員会と職員の読書推進部が協力し、各学年で年3回の「読み聞かせ」を実施している。また、生徒会も読書推進部と連携し、「朝読書」「給食時間の本の紹介」「図書貸し出しクラスマッチ」に取り組んでいる。

ウ 菊池南中学校推薦図書の選定

本校職員が推薦する推薦図書100冊を、2年かけて作成した。図書室には、推薦図書のコーナーを設置し、生



●図1／読書記録簿

徒には、読書記録簿を配布している。生徒の読書への意識を高めるとともに、先生方の読書に対する意識づけの一助となっている。このような取り組みがあって、図書室の1年間の一人当たりの平均貸出冊数は、年々増加している。

H17	H18	H19	H20	H21
3.7冊	5.2冊	6.1冊	7.2冊	前年比+0.9冊

●表1／一人当たりの図書貸し出し数（年）

エ ノーテレビ・ノーゲームデーの位置づけ

校区の小中学校で、毎週木曜日をノーテレビデーとし、「読書活動の推進」や「家庭のコミュニケーションの確保」に取り組んでいる。

(3) 表現力や感性を高める取り組み

○毎日の感想を、生活ノートに書く指導

○ノートの取り方や話し合いの指導

○壁新聞の作成

3 授業改善の取り組み

(1) 評価問題の開発

全国学力・学習状況調査と県学力調査についての研修を行い、これらの出題の仕方や問題を参考にした評価問題を全教科で開発した。

(2) 家庭学習の習慣化

○家庭学習の時間（南中タイム）を設定する。

○生活ノートに「学習の手引き」「計画表」を設け、学習の取り組み方を身につけさせる。

○学年通信に、「週末課題」と「今週の学習内容」を掲載し、家庭との連携を図る。

(3) 学習ルール「南中ルール」の共通実践

○黙想で授業開始

○休み時間中に学習用具の用意

○指名されたら「ハイ」と答え、起立して発表

○「〇〇です。それは、(理由) だからです。」

○「目」と「心」で話を聴く

(4) 読解力向上の視点をもった授業の確立

ア 授業開発の目的

○各種調査で明らかになった課題を解決し、学習意欲と学力を向上させる授業を開発する。

○全教科で共通実践することで、生徒により学習習慣と学び方を身につけさせる。

○全教科で、国語力の向上（思考力・判断力・表現力等の言語活動の充実）に取り組む。

イ 全教科共通の授業展開

○学習課題の提示

○学び合う場の設定

○本時の基礎・基本を定着する場の設定

○家庭学習の提示

※国語力向上については、文部科学省が提示した「読解力（PISA型読解力）向上のための『七つの指導のねらい』」の中で、該当するねらいを指導案に明記し、学習活動を示しながら説明する。

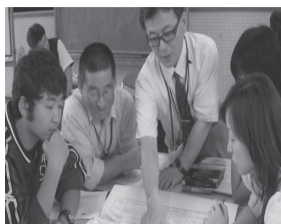
中学校では、どうしても教科の壁がある。しかし、授業展開を全教科共通にしたことで、授業参観の視点が明確になった。この4視点は、全教



●図2／板書用のカード

科で板書している
ので、生徒も理解
できる。

本校の授業研究
会では、話し合い
は班で行い、課題
については改善点



●図3／授業研究会の様子

まで考える。話し合いの内容は、各班の代表が
時間とテーマを決めて行うので、職員の話し合
いや発表のスキルも高まり、授業に生かされて
いる。

3. 研究の成果

1 授業改善への職員の意識の向上

県の意識調査から、本校職員は、授業改善や
教材研究に、県と比較すると意欲的であること
が明らかになった。それに応じて、生徒の「勉
強が面白い」「授業が役立つ」「じっくり考えて解
くのは楽しい」などと、考える生徒が増加して
いる。また、職員に国語力向上に取り組まなけ
ればという意識が定着した。

2 全教科で、読解力向上の指導のねらいを位 置づけた授業を、実践することができた

3 学習コンクールの入賞の増加

「作文」「俳句」「標語」「弁論」「研究」など
のコンクールで、最優秀賞や優秀賞など、県や
全国の上位に入賞する生徒が、平成20年度から
増加している。全ての教科で国語力向上に取り
組んだことで、表現力が高まったり、感性が磨
かれたりしているようである。

4 学力調査の結果の向上

平成20年度から、全国学力・学習状況調査と
熊本県学力調査で平均を上回った。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

公正な判断に基づき 合意形成を目指す 生徒の育成

上越教育大学附属中学校

やなぎさわ かず てる
柳澤一輝

【実践の内容】

3年生公民的分野の憲法及び司法権の学習と
道徳及び学級活動の関連を図り、単元「きみの
裁判力を問うーあなたは争いや問題を解決でき
るかー」を構想し、ダイナミックな学習となるよう
実践化を試みた。

【論文内容の紹介】

1. 論文の概要

裁判員制度がスタートし、6名の裁判員と3名
の裁判官が協議し、合意を図りながら判決や量
刑を決定する。この合意に至るまでの過程は、
民主社会における我々の生活でも重要となる。
また、生徒の実態からも「決まりやルール」につ
いて、公正な判断に基づき行動する生徒の姿を
伸長したいと考えた。そこで、下図のように単元
を構想し、生徒の変容や成長を追った。

加えて、以下の取り組みを位置づけ、進めた。

- ①多様な視点から価値判断する追究活動を位
置づけた。
- ②決まりやルール・法について学級の仲間や
他者と討論や議論する場を位置づけた。
- ③地方裁判所判事を招き討論したり、生き方
を学んだりする場を位置づけた。
- ④発表を工夫し、表現のスキルの向上を図る
活動を位置づけた。

2. 実践の流れと主な学習活動（全9時間）

1次：だれのため？ 決まりや法（1時間）

○決まりやルール・法について、「他者と意見が食い違ったら」「ルールの意義」について自分の考えをまとめた。

2次：皆で決めてよいこと・皆で決めてはならぬことは？（2時間）

- 意思決定の最善の方法を考えた。
- 国政において、皆で決めることと決めてはならぬことを考えた。
- 多数決の原理・民主主義を確認した。

3次：きみの「裁判力」を問う！（4時間）

- 裁判員制度について、最高裁判所刊行の広報用映画「評議」を視聴する。
- 道徳の自作資料を基に、最も適切な解決方法をロールプレイで表現し、シェアリングを行った。
- 事例（刑事裁判）を基に、学級の仲間や判事と討論し、価値判断を行った。

4次：あなたならどうする？（2時間）

- 社会問題となった、実際に起こった殺人事件について、模擬評議を行った。
- 公正な判断の基、合意を図ることを実生活と関連づけ、レポートにまとめた。

3. 実践の成果

- ①「決まりやルール・法について、学級の仲間や他者と討論や議論する場を設定した」ことで、公正な判断の基、合意を図る生徒の姿がワークシートや授業の様子から見られた。
- ②「発表を工夫し、表現スキルの向上を図る活動を位置づけた」ことで、仲間や他者にわかりやすく自分の考えや主張を発表・提案する生徒の姿が見られた。

●奨励賞【論文概要紹介】

中学校理科における タブレットPCの活用 方法の検討

和歌山大学教育学部附属中学校

や の みつひろ
矢野充博

【実践の内容】

筆者は平成21年から中学校3年の理科において、4人の班に1台の割合で生徒にタブレットPCを使用させて授業を行っている。

今回、物理分野の活用方法を検討した。

【論文内容の紹介】

1. 研究の目的

タブレットPCは、画面にペンや指で直接触れることで入力することができる情報機器である。平成19年に1300台を導入した和歌山市では小学校の国語と社会を中心に活用方法の検討が始まっているが、中学校での導入や活用の検討はまだ行われていない。

本校の理科では、生徒に「豊かな学び」をさせるために、「言語活動の充実」や「協同的な学び」に着目して授業を行っている。つまり、考えを表現する過程で深く考える力を育てたり、他者とのかかわりを通して自分の考えを深化させ、新しい考え方に触れさせるというものである。それらにかかわって、次の四つの点を明らかにする目的で、理科の授業でタブレットPCを活用した授業実践を行った。

- ①画面に直接書き込むことの効果
- ②理科の教科性を活かした使い方
- ③情報を共有するための無線LANの利用

④学びの質を高めるための利用価値の検討

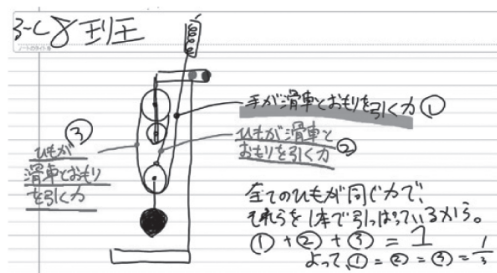


2. 実際の授業

(1) 実験の手順を無線で配信

無線LANで教師用と生徒用PCを共有化して、教師用PCの「本日の指令.txt」を生徒にダウンロードさせた。そこには実験の詳しい方法や注意事項、ポイントを書いておいた。

(2) 考察させる場面での活用



実験後に結果からわかることを個人で考察させた。その後、班員で意見を交流させてから、タブレットPCの画面にWindows Journalで考えを書かせた。活用した単元は「①斜面を運動する物体の速さの測定」「②ティッシュペーパーを用いた位置エネルギーの大きさの測定」「③ビニルホースを用いたエネルギー保存の法則を確認する実験」「④滑車を用いた仕事の原理の実験」

(3) 班での考えを教室で共有するための活用

SharedViewというソフトはLANを利用すると、1台のPCの画面を、そのままほかの全てのPCの画面に映し出せる。授業では、書き込んだものをその場で見せながら発表させた。

(4) 理科の教科性を活かした使い方

Webカメラと運動解析ソフトMOA-2Dを使って、ピンポン球の運動をストロボ写真のように表示させて、運動の規則性を学ばせた。

3. 成果と課題

タブレットPCでは、考えた図や説明文をノートのような感覚で気軽に表現できた。その際、班での積極的な話し合いも見られた。

また、無線LANを利用すると、考察等を班で発表するときに、スムーズにプロジェクタの画面やほかのPCの画面に同時に映し出すことができたので、実験機で自分たちの画面に書き込みながら発表するという使い方もできた。

ただ、タブレットPCを使いこなすには多少の慣れが必要であるが、継続して何度も生徒に触れさせることで、克服できるようである。これからもうまく活用していきたい。